



らまった糸をときほぐすように分析し、「君臨すれども統治せず」ともいえる現在の毛沢東の立場を端的に映し出すことに成功している。そして、このような経過のなかでの鄧小平の復活こそ「脱文革化」の象徴的事件だとみなし、鄧小平復活は同時に五六年の「八全路線への回帰」だと説いている。従って、新しい党の再建は、「九全体制から離脱した『周恩来体制』下の党再建であり、極言すれば『周恩来の党』の建設であろう」と著者は予測していたのであった。このような見方に立つ著者は、鄧小平復権も周恩来体制の枠組のなかでの出来事だとみなしており、昨夏の十全大会は、「毛沢東以後」の時代に備えるために、「ほぼ完全に周恩来首相のコントロールのもとに開かれた」ものだったといきっている。そして、十全大会における王洪文の登場は、周恩来路線による「文革派の分断」の成功によるものであり、王洪文も、張春橋も、実務派行政派としての周恩来路線に組するものだとし、十全大会と前後して起った「批林批孔」運動についても、「文革派の自己防衛策」としての側面があるものの全体的には周恩来路線のコン

トロールのもとに置かれているとして、「批林批孔」運動にみられる「周恩来危機説」を完全に否定している。以上で紹介したように、著者は、文革の挫折から「批林批孔」運動までの激動の政治過程を、「周恩来体制」の揺るぎない確立の過程とみなしており、「こんにちの中国の政策決定のほとんどが周恩来の指導力に負っており、毛沢東の最高指導者としての権威も、周恩来によって『保護』されていると見ざるを得ないのである」とまで力説している。

このような著者の一貫した立場は、きわめてユニークなものであり、本書を野心的な著作たらしめているゆえんである。今後、著者のこの野心的な仮説がどのように実証されてゆくのか大いに注目すべきものがあるが、中国の政治の大きな方向が、今後さまざまな曲折を経ながらも、革命主義よりも現実主義の方向をたどらざるを得ないことは、もはや逆えない時代の流れであることは否定し得ないであろう。だが同時に、それゆえにこそ、このような潮流に逆らおうとする「反潮流」の動きが内在するのであり、「批林批孔」運動はまさにそうした「反潮流」運動であるといえる。だ

から本年春以来、「周恩来の時代」に翳りが見え、「批林批孔」運動のなかに周恩来批判が含蓄されていることも、著者の予想した周恩来体制下の全国人民代表大会が依然として未開催であることともいかにかんともしがたい事実である。この点で十全大会以降のプロセスの分析には、中国の文献にもっと即した分析がほしかったし、立論にかなり強引な箇所も見られないではない。西側の学者やジャーナリストの言による傍証も、やや恣意的であるように思われる。著者の見方は毛沢東絶対化論を排するあまり「周恩来絶対化論」に陥っているのではないかとする一部の批判を念頭に置いたためか、立論上、わが国における「文革派優位説」に立った「周恩来危機説」を想定した、それへの反論も多いが、「周恩来危機論」はそれほど単純な図式によるものではないようにも思う。これらの点で立論の仕方はいま少し注意がはらわれるべきではなかったかとも思われるが、本書が激動の中国をとらえるためのきわめて有益な指針となるであろうことはいままでもなく、まさに時宜に適した好著として広く読者に推奨したい。